

マララ・ユスフザイさん

—国連演説からノーベル平和賞受賞演説へ—

東條 加寿子

16 歳の少女、マララ・ユスフザイさんが国連で演説したのは 2013 年 7 月 12 日。その 1 年半後、2014 年 12 月 10 日、マララさんはノルウェー・オスロのノーベル平和賞受賞演説に臨んでいた。

マララさんの国連での英語の演説は今やあまりにも有名で、中・高の授業用に教材化も進んでいる。筆者も、高校での模擬授業の機会があるたびに「16 歳の少女の国連演説」と題してマララさんの英語スピーチを題材に授業を行ってきた。また、教員免許状更新講習などの機会を捉えて、現場の先生方とこのスピーチの教材としての可能性を研究し、議論してきた。本演説は比較的平易な英語表現でつづられていて生徒たちにとって理解しやすいし、現代の国際社会を読み解くために必要なイスラム世界の諸要素がリアルに編みこまれており、国際理解、時事問題、生きた英語表現の観点から恰好の素材である。模擬授業が終わると、決まって生徒たちは演説の最後の下りを口にしながら教室を出ていく。

One child, one teacher, one book and one pen can change the world. Education is the only solution. Education first.

同世代の少女の英語表現は簡潔かつ印象的で、瞬時に生徒たちの心を捉える力をもっているようだ。

国連演説から 1 年半、まだあどけなさを残していたマララさんの瞳には鋭い輝きが加わり、その眼差しはノーベル平和賞受賞者にふさわしい凜としたもの変わっていた。平和賞受賞演説も国連演説に勝るとも劣らず見事で示唆に富んでいる。平和賞受賞演説の中で、マララさんは世界中の子どもたち、特に女性が、質の高い教育(quality education)を平等に受けられるようにと訴え続けている。その主張は、自分と同じ境遇と志をもった少女たちの存在を全面に押し出すことによって一層力を増しているように思える (This award is not just for me; I tell my story, not because it is unique, but because it is not.)。同時に、国連演説では見られなかったことであるが、平和賞受賞演説では教育の機会を奪われた子ども(a child deprived of education)の一人として、大人(the so-called world of adults)や政治家(the politicians; the world leaders)、先進国を対極において発言しており、そのことによって世界に伝えたいメッセージをより鮮明に具体化しているように感じられる。そして極め付けは、当事者である子どもたちや少女たちへ

の直接的な呼びかけ(啓蒙)である。

Dear sisters and brothers, dear fellow children, we must work, and not wait. Not just the politicians and the world leaders, we all need to contribute. Me, you, we, it is our duty.

Me, you, we に続いて ”our duty”が明言される頃までには、聴衆は完全にマララさんの主張に飲み込まれている。演説はこの他にも周到なレトリック満載で、見事である。このような生きた素材を活用できる授業力を磨きたいものだ。

「新しい年の初めに、世界の平和を願う。」 そんなフレーズが現実味をもつ 2015 年の始まりである。

---

(とうじょう・かずこ 教授/教員養成センター)

---